

ウルリム
響

星 環

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第64号

2016年12月1日発行

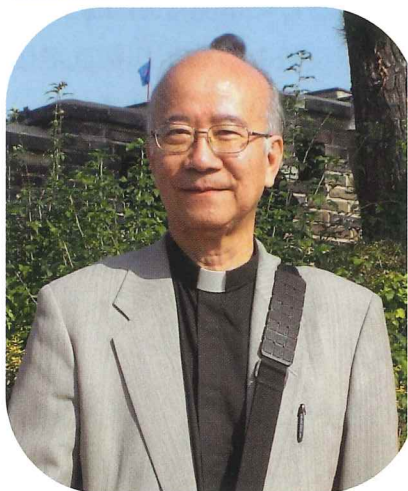
題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: nskikuno@gmail.com

聖公会生野センター

検索



機動隊によるヘイトスピーチ

司祭 ペテロ岩城聰

わが耳を疑った。ネットを通じて配信された大阪の機動隊員が、沖縄で米軍

基地の工事に反対する人々に浴びせた言葉だ。文字にするには余りにもおぞましい、侮蔑と差別に満ちた言葉だった。それは、在日外国人や被差別部落の住人、障害者に向けられた「ヘイトスピーチ」と同質のものだった。より深刻なのは、それが社会の治安を守ると称する公務員、警察の構成員から発せられたということだった。しかも大阪府知事は、その彼に対してねぎらいの言葉すらかけたのである。

なぜ、このような人を人とも思わない、憎悪の言葉が機動隊員から出てくるのだろうか。至るところで野放しになっているヘイトスピーチ(憎悪演説)に接する中で学んだということもあるだろう。周りの機動隊員に対して自らの「戦闘意欲」を誇示したかったのかも知れない。デモや座り込みの人々をののしることで、自らの「正当性」を確認したかったのかも知れない。しかしもっと大きな背景としては、警察機構の中で、また機動隊教育の中で、沖縄の人々や時の権力に逆らう

人々(デモ隊員や「サヨク」)に対する強烈な差別意識と敵意が醸成されているということではなかろうか。そうでなければ、違ったところで違った機動隊員から、同じような言葉の暴力が発せられることはないだろう。

さらに深刻なことは、このような発言に共鳴するような社会的雰囲気を作られ、その中でネット右翼(略称ネトウヨ)と呼ばれる人々の言いたい放題の書き込みがゆるされているという現在の社会状況ではないだろうか。インターネットでは、この発言をした機動隊員を褒めそやし、その問題性を指摘した人々やメディアを罵倒する書き込みが威勢良く踊っている。なんということだろう。

相模原市の障害者施設の入居者をターゲットに行われた大量殺人事件も、また同じ土壌の中から生まれた痛ましい事件である。これらはすべて、強者の側から、権力を保持している者の側から生み出された犯罪である。

イエス・キリストは常に、小さくされた人々、社会的弱者の側に立って、神の福音を述べ伝え、命をさえ献げられた。わたしたちキリスト者は、現在のような社会状況の中で、どのような立場をとるのだろうか。

(いわき あきら 川口基督教会牧師)

韓国＝「金英蘭」法制定＝

「賢者さえも、虐げられれば狂い、賄賂をもらえば理性を失う」
(コヘレトの言葉 7 章 7 節)

司祭 香山洋人

9月28日、お隣の韓国で通称「金英蘭」法と呼ばれる法律が施行された。これは公職者に対する賄賂を厳しく取り締まる法律だが、公職者には公務委員だけではなくマスコミ関係者や私立学校の教員なども含まれており、本人だけではなく家族についても法が適用されるという徹底ぶりだ。原案には国会議員が含まれていたが最終的には対象から除外されている。こうした妥協に市民社会からは批判があるものの、韓国社会の一大改革につながるのではないかと期待されている法律だ。

もちろんこの法に反対する声は強かった。接待やプレゼントは社会通念上許されるものであり、感謝の気持ちを表すことが法に触れるのであれば人間関係が成り立たなくなる。礼儀、恩義を重んじる伝統文化に反する悪法だ。何より饗応の習慣は韓国社会に大きな経済効果をもたらしてきた、などの批判の声が湧き上がった。「韓定食」などの高級店は接待での利用を当てにしていることが多く、この法律が施行されれば一番打撃を受けるのは高級志向の飲食業界だとも言われた。官庁街からは今年の忘年会は9月27日にというジョークも飛び出しているという。

この法律によれば、公職者に対して食事は3万ウォン、プレゼントは5万ウォン、慶弔費は10万ウォンを超えて提供してはならない。違反者を申告すれば報奨金を与える規定も添えられているから実効性はあるだろう。夜、ソウルでお酒を伴う食事をすればとうてい3万ウォンでは収まらない。デパートに並ぶ贈答品も5万ウォン以下を探す方が難しいかもしれない。この金額は非現実的

だとも言われるが、それだけに本気度がうかがい知れる。地縁血縁、先輩後輩のつながりを重んじる点で日本と韓国は共通の文化圏に属するが、「社会の腐敗度」に関する国際的調査で、韓国の成績はかんばしくない。多くの犠牲によって勝ち取られた民主化が一気に逆行しようとする中、「劇薬」とも評される金英蘭法が施行されたことはいいニュースというべきだろう。

これは特定の文化の問題ではない。旧約聖書の時代から賄賂は横行していた。日本でも贈収賄の事件は後を絶たないが、それを厳しく罰して悪習を断ち切ろうという断固たる意志があるかないかは、その社会の健全さの指標ともいえるだろう。賄賂に代表される不正を解決しなければ政治の腐敗は防げない。人権の概念を大きく前進させたとされるフランス革命宣言の前文には、「人の権利に対する無知、忘却、または軽視が、公の不幸と政府の腐敗の唯一の原因である」と述べられている。もちろん賄賂は問題であり、金品の授受と利益供与とが不透明な権力構造と権力の乱用につながっていることは見逃せない。しかしそれ以上に、人権を軽んずることこそが「政府の腐敗」の最大の原因であることも忘れてはならない。

聖書が賄賂を厳しく告発したのは、賄賂によって裁きが歪められ、弱者の権利が保護されなくなるからだ。それは金品の授受とは限らない。権力者の顔色を伺うこと、世間の評判を気にすること。正義が歪められる要因はそこここにある。

(かやま ひろと
東京教区 聖テモテ教会牧師)

NPO＝ミッションを共に担う

呉 光現

関西の私たちにとって忘れられない1995年の阪神大震災。「ボランティア元年」とも言われました。全国、海外からも多くの人たちが神戸に駆けつけました。30代半ばだった私も2年以上神戸、特に長田地域を中心に活動しました。私たちは教会はもちろんのこと国内外から多くの人的・財政的支援を受けました。しかしさまざまな不自由さもありました。口座開設や携帯電話の契約一つにしても個人しかできなく一時は私の名義で10台近い携帯を契約したものです。

「ボランティア元年」から4年後、「特定非営利活動促進法（NPO法）」が制定され、日本社会での非営利活動が法的位置を得ることができるようになったのです。従前の非営利団体といえば「社会福祉法人」「社団法人」「財団法人」などで一般の市民がその法人を立ち上げるにはとてもハードルが高かったのです。この法により市民活動が社会的地位を得たことは同時に「責任」も生じることになりました。個人での思いは「やらなければいけない」というパッション（情熱）に支えられます。とても貴重なことです。そしてNPO法人は個人のパッションだけでなく民法上の法人としてミッション（任務）を担います。それは社会の一員としてよりよき社会を作っていこうという理想がそこにはあります。聖公会生野センターも2005年に法人格を取得しました。

この7月、生野区で「生野区NPO連絡会」が結成されました。2年間の準備期間を経て作られました。これを機会にWEBサイトで生野区のNPO法人を見てみたら他の地域とは違う特徴に気がつきました。ミッションを担うNPOが「専門店」とするなら日常の地縁・血縁の地域社会は

「総合店」です。懐かしい言葉で言うと「よろず屋」かもしれません。生野区NPO連絡会はいろんな背景を持っている人たち、外国人・障がい者・高齢者…が「街の中で自分らしく生きていく」ことを目指しています。それは専門店と総合店が、さらに行政とも協力しながら「住んで良かった」「住んでみたい」生野区を目指すということだと思います。

生野区の特徴とは法人名に「コリア」、「同胞」、「外国人」などがついている団体が多くあることです。同胞とは在日同胞のことで在日韓国・朝鮮人を指します。生野区には多くの在日が住んで、ミッションとしてこの課題が大きくあることを示しています。

今さらですが生野区には人口13万人のうち、韓国籍・朝鮮籍の人だけで2万人を超える人が住んでいます。観光地のコリアタウンは古くからの朝鮮市場があったからこそ多くの人が訪れる楽しい街になりました。

現在の日本は外国人居住者が200万人を超えました。日本社会でいろんな経験をし、生活しています。決して「楽しい経験」ばかりではありません。外国人であるが故のつらいことや苦しいことは多々あるのです。それは私たちの両親の経験と重なります。在日一世が多くの苦労や挑戦をして私たち二世にバトンタッチをしてきたように、次は「在日の先輩」として「後輩の在日外国人」と私たちの経験を共有してここで一緒に生きていきたい街を作っていきたいと思います。その一翼を聖公会生野センターが担えることに感謝したいと思います。

(お くあんひょん 聖公会生野センター総主事)



のりばん



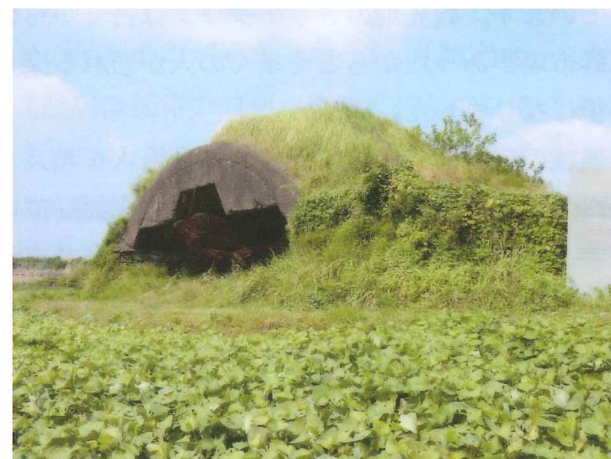
こみち寄席



(上) ビジョントレーニングセンター
(右上) つるの橋



済州島スタディツアー 2016

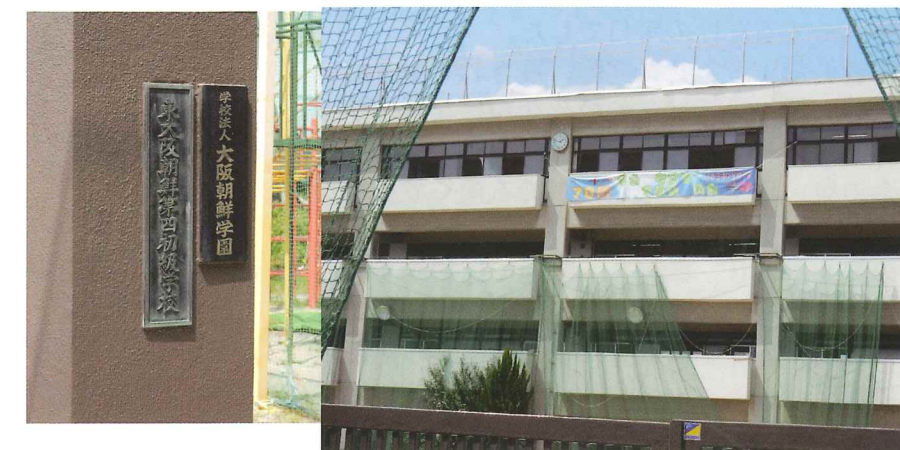


(上) アルトル飛行場跡
(右上) 北村慰霊碑
(右) トルハルバン



聖公会済州教会

(右) つるの橋跡
(右下) 朝鮮学校
(下) 朝鮮学校門



済州島スタディツアーの感想

風に吹かれて

嵯峨崎 順子

衝撃的な毎日の現場で、当日感じたこと、思ったことをそのまま寸描します。

○木綿のハルモニ＝あの時の痛みは吹きとばされた下顎だけでなく、心にも、目にも、耳にも終生消えることはなかったでしょう。ことばや飲食に不自由はあったけれど地域や親族の方とのコミュニケーションがあった様子に救われる思いでした。

○平和公園＝雨の中の訪問は墓地に眠る人達の涙を受けている感じでした。文字による事件の情報は得ていたが、現地に立つと風、土、匂い、空の色がその事実を映像化し迫ってくる。きれいに整えられた広大な公園なのにどんよりした雨もよりの空が一層当時の悲惨な状況を解明してくれる。

○南西部海岸の墓地を回る＝畑の中に点在する墓地を見ながら日々農作業をされる人達に思いを馳せる。消せない思い出だけでなく、今の暮らしを報告したりする先祖達との語らいもあるのではない、あればいいのと思う。

○聖公会済州教会での交わり＝夜8時という聖餐式に多数の方が出席して頂いたこと、すばらしい讃美の声、力強い説教、おもてなし等に感謝。ことばは違いが主を讃美し、祈りを合わせることで又力が与えられました。

最後に＝現地で見聞きする内にアタマはまっ白、ことばがでない。文字にも表せない。聞いたことをメモするだけの毎日でした。

被害者も加害者も共に同胞。残されて生きていく一族の方達の重荷は？何故死なねばならなかったのか？訴えることも出来ず銃口の前に立たされた無念の思いは？問いばかりがでる重くて貴重な旅でした。

この旅を計画し、準備し、現地では細かくお心遣いして下さった大阪教区の主教様、司祭様、呉さん、現地でお世話になった皆様に心から感謝申し上げます。

(さがさき じゅんこ 奈良基督教会信徒)

済州島スタディツアーに参加して

出雲 訓江

この旅の参加の動機は「聖公会生野センター」で昼食のボランティアに行っているうち、在日コリアンの方々が「済州島に帰省、行ってきた」との会話を耳にしていたからです。そして「行ってみたい」と考えていました。

今回、チャンスに恵まれ聖公会大阪教区企画のツアーに申し込みました。

届いた「栞」の日程は主に歴史を学ぶコースでした。私の軽率な参加動機に反省します。

機内で「土産は（木綿のハルモニの家）で手織りの綿、（民俗村）では柿渋を買いいたいな！妹、姪に荏胡麻油、顔のパック」と考えを回らす内に済州空港に着陸しました。

参加者19名、四日間滞在中、三ヶ所巡礼させて頂きました。

昼食後、直ちに四・三事件の跡地を巡礼、現地の語り部の方に事件の状況を如実に語って頂き、通訳は同行した「生野センター総主事呉光現」さん、ていねいに通訳、感謝でした。

各所の慰霊碑で黙祷を捧げ、各自の小さな祈りが大きな平和の祈りになるよう願った。

観光も十分楽しませて頂き、噴火によってできた島、中心部は雄大な山「ハルラサン」がそびえ、沿海は立派な一周道路が通り生活交通網が充実していました（鉄道はありません）。

自然の神秘を感じる溶岩洞窟、風光明媚な城山日出峰、民俗村（柿渋なし）を観光。

最終日、海へと流れ落ちる滝を見学、美しい国立公園である山岳のドライブコースを走り、窓から眺め、縦断し空港まで無事故で解散。学びの旅に感謝します。

(いずも くにえ 奈良基督教会信徒)

「済州島4・3事件を記憶、そして在日から平和を作り出す」

本書は、2015年に牛込聖バルナバ教会で行われた呉光現氏の講演録。

呉光現氏は済州島出身の両親のもと、1957年に大阪市の猪飼野（現、生野区）で生まれた。日本の植民地

政策で島全体が貧しかったため、呉氏の父親は1930年の初め18歳のころ「君が代丸」で渡日する。大阪市西成区の蒲鉾工場で働くが劣悪な労働環境だった。そのため親戚を頼って猪飼野へと移った。母親は1945年の終戦後（解放後）秋に渡日する。

呉氏が自身のルーツに関心を持ち始めたのは高校時代だった。読書少年だった呉氏は偶然、金石範氏の小説『鴉の死』に出会う。それは済州四・三事件を題材にした作品だった。初めて「済州四・三事件」（以後、四・三事件）という言葉に触れた呉氏は、父親にどのような出来事だったのかを尋ねるが、父親から激怒される。普段温厚な父親だったため、激怒する姿にショックを受けた呉氏は、それ以降四・三事件について尋ねることを止めた。しかし、その出来事は四・三事件に関心を持ち続ける一つの契機となった。

四・三事件は「済州島で起きた南北分断に反対する武装蜂起に端を発し、その鎮圧過程で、島民の一割以上の三万人近くが犠牲になった悲劇」（呉氏）や「1948年の済州島四・三蜂起にはじまり、軍と警察の討伐過程で済州島の民間人が虐殺された事件」（金東椿氏）と説明される。しかし、2016年11月6日付けのある新聞の記事で

「済州島は左派島民の武装蜂起（48年）を韓国軍が鎮圧した事件があり」と説明されているように、日本ではまだまだ認識不足の感がある。ただそれは日本だけのことではない。韓国でもつい

最近まで四・三事件は「共産主義者による暴動」とであると広く認識されていた。犠牲者は「暴徒」という汚名を着せられ、生きのびた人々も差別と深い悲しみから事件について語ることが出来なかった。語ることが禁止されていた時期も長かったのだ。呉氏の両親もそれぞれが四・三事件で兄弟を亡くしているが、呉氏がその詳細を知ることができたのは1998年以降のことである。

韓国政府が「済州四・三事件真相糾明及び犠牲者名誉回復に関する特別法」（四・三特別法）を制定したのが2001年1月であり、それを受けて『済州四・三真相調査報告書』が作成されたのが2003年10月である。この調査報告書では当時の盧武鉉大統領が国家権力の過ちに「心からのお詫び」をしている。

事件から半世紀が経ち、やっと事件について語ることが出来た人、故郷に戻り家族を弔うことができた人が現れるなど、少しずつ沈黙の壁が破られてきた。しかし解決へはまだ道半ばのようだ。呉氏は、真の解決のためには「和解と相生の精神」が必要だと語る。それは呉氏自身の人生を通して、また事件の真相解明と犠牲者・遺族の名誉回復の活動をする中で見いだした答えだろう。

「四・三事件の解決というのは、わたしは最終的には人間の解放につながらなければいけないと思っています」という一言が印象的だ。四・三事件が解決するとき、それは人々が相互に理解しあうときである。同じ根っこから多くの木が生え得る社会・世界への道のりはとても長いかもしれない。しかし私も共に歩みたい、そんなふうを感じる講演録である。

(ふるさわ ひでとし 高槻聖マリヤ教会牧師)

著者：呉光現氏（生野区生野センター）

「済州島4・3事件を記憶、そして在日から平和を作り出す」

呉 光現

収録：「済州島4・3事件」史料館の歴史



日本聖公会 関東三教区生野委員会

コラム・一粒の麦

赤カブのジュース

司祭 ミカエル 広谷 和文

呉光現さんにさそわれて濟州島を訪ねた。旭川から参加した私は、飛行機の都合で一日早く濟州島に到着。翌朝、ホテルから歩いて三姓穴（サムソンヒョル）に出かけた。「耽羅国」発祥の地と伝えられるところ。芝生の中央に島の先祖である三人の神人が出てきたと言う三つの穴がある。天から降ってきたのではなく、地から湧いてきたというところが面白い。三姓穴の裏手に「大覚寺」というお寺があった。「濟州島にも大覚寺があるんだな」と、その名前につられて境内に入ると、五十年配の住職が待っていたかのように、ニコニコ笑って立っている。「失礼しました」と去ろうとすると、「入って下さい、本堂も見て下さい」と言う。十畳ほどの本堂と民家のような庫裡があるだけの「大覚寺」であった。目の大きな金色の本尊と向き合って、この仏像に祈り続けた人々のことを考える。住職が休んでいけと言う。冷やした赤カ

ブのジュースが用意されていた。飲むと体の調子が良くなると言う。飲みながら寺のことをあれこれ話してくれる。話しながらも終始ニコニコ。濟州島方言らしく、解せたのは十分の程度だろうか。が、その気持ちはしっかり伝わった。また来いと言う。パック入りの赤カブジュースのお土産までもらって（それも沢山！）、大阪からの一行が到着する濟州国際空港へ向かったのである。その日の午後から始まった「4・3事件」巡礼は、私の人間理解をひっくり返すほどの体験となった。気持ちは深く沈んでいく。そのような時、ふとあの住職のニコニコ顔が思い浮かぶのだ。「あのお坊さんが、あの島に住んでいるのだな」。やはり人間は信じられるし、信じたいと思うのである。

（ひろや かずひろ 旭川聖マルコ教会牧師、稚内聖公会・留萌キリスト教会・深川聖三一教会管理牧師、旭川頌栄保育園チャプレン）

= 余韻 =

■ SNS、一言で言うとインターネットのコミュニティー。世界中の多くの人が利用しているがどうもこれは両刃の剣だ。ネットの言葉だけを信じてヘイトスピーチを垂れ流す人たちが多くいるがどうもそれがリアル（現実）の世界にもじわじわと拡がっているのではないかと平気で「土人」と公務員が発言してもとがめられない社会は病んでいる。■ トランプは間違いなくアメリカ史上最悪の大統領になる。これは確信がある。戦争の反省が人権の尊重であったのが21世紀の今。どうなっていくのだろうか？（ピクアンチャ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇ 正会員 年額 1口 10,000円
- ◇ 後援会員 年額 1口 3,000円から
- ・ 郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
- ◇ 自由献金・クリスマス献金
- ・ 郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
- ・ 銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店
- ・ 普通預金 4654965「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0002

大阪市生野区小路3丁目11番19号

TEL 06-6754-4356 / FAX 06-6224-7856

E-Mail nskkikuno@gmail.com

<http://www.nskk.org/province/ikuno>

発行人：磯 晴久

編集人：呉 光現